

四街道市小屋ノ内遺跡出土の土製品について

四 柳 隆

1. はじめに

四街道市物井地区は、物井古墳群・小屋城跡をはじめ旧石器時代から中世にかけて数多くの遺跡が存在することで知られている。住宅・都市整備公団による土地区画整理事業に伴い、既に当センターによって昭和59年度より調査が行われており、御山遺跡、清水遺跡、出口遺跡、出口・鐘塚遺跡、新久遺跡、棒山遺跡、棒山・呼戸遺跡、高堀遺跡の各遺跡がその対象になっている。(第1図)

小屋ノ内遺跡については、平成元年4月より確認調査にはいり、12月現在本調査中である。これまでに古墳1基、奈良・平安期の竪穴住居跡20軒とそれに伴うと思われる掘立柱建物跡30棟、多数の土壌・ピットが確認されている。今回紹介するヒト形土製品は、精査中に掘立柱建物跡のプラン確認面から出土したものである。

2. 小屋ノ内遺跡の概要

① 遺跡の立地

小屋ノ内遺跡は千葉県四街道市物井字小屋ノ内に所在する。物井地区の遺跡は、いずれも千葉市土気町付近を水源とし印旛沼に流入する鹿島川の左岸の小支谷によって、樹枝状に開析された台地上に存在する。台地上の平坦部はほとんどが遺跡であるといっても過言ではないほど密に分布している地域である。この台地から南に向かってのびる舌状台地の縁辺に当遺跡は存在する。標高は、30～31mを測る。

② 遺構

小屋ノ内遺跡では、現在までに円墳1基、竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡30棟と多数の土壌・ピットが確認されている。

古墳は戦後畑地として開拓された際に墳丘部分



第1図 遺跡の位置 (1/25,000) 1. 小屋ノ内遺跡 2. 小屋城跡 3. 御山遺跡 4. 新久遺跡
5. 清水遺跡 6. 出口遺跡 7. 棒山・呼戸遺跡 8. 棒山遺跡 9. 出口・鐘塚遺跡
10. 高堀遺跡 一国土地理院発行の1/25,000地形図(佐倉)を使用—

が削平されており、埋葬施設は残っていなかった。しかし、旧表土と思われる黒褐色の封土の上には灰褐色の粘土の散布が見られ、その上面からは6世紀初頭のものと思われる剣形石製模造品が出土している。また周溝内では、底面から20cm程のところで7世紀初頭のものと思われる須恵器の大甕が出土している。さらに、地権者の話から開拓の際に鉄刀一振が出土したと、石棺と思われる石は無かったことがわかっている。現在のところ年代を限定できる決定的な資料は見つかっていないが、6世紀代の木棺直葬の古墳であると考えている。

竪穴住居跡と掘立柱建物跡については現在プラン確認までの状況であるが、掘立柱建物跡が大変多いという点で特徴的である。現在本調査中であるため、詳細については後日報告したい。

③ 遺物

先述のとおり当遺跡は畑地であったため確認面直上まで耕作土であり、遺物の層位的な出土は見られなかった。また、遺構の調査も始まっておらず今後新たな資料の追加はあるものと思われるが、とりあえずこれまでに確認されている遺物について紹介しておこうと思う。

縄文土器としては早期の擦糸文系（井草II・夏島）と条痕文系（茅山上層）、前期（黒浜・浮島系）、中期（阿玉台）、後期（安行I）が確認され

ている。弥生時代の遺物は、未だ確認されていない。

土師器は、五領期と鬼高期を除いて存在する。ただし、一辺が7～8mの大型竪穴住居跡のプランが3軒分確認されているため、鬼高期の遺構・遺物は今後検出される可能性が強い。須恵器は8世紀のものがほとんどである。

このように当遺跡は、弥生時代と古墳時代初頭の時期をのぞいて綿々と存続した、いわゆる複合遺跡であるといえる。

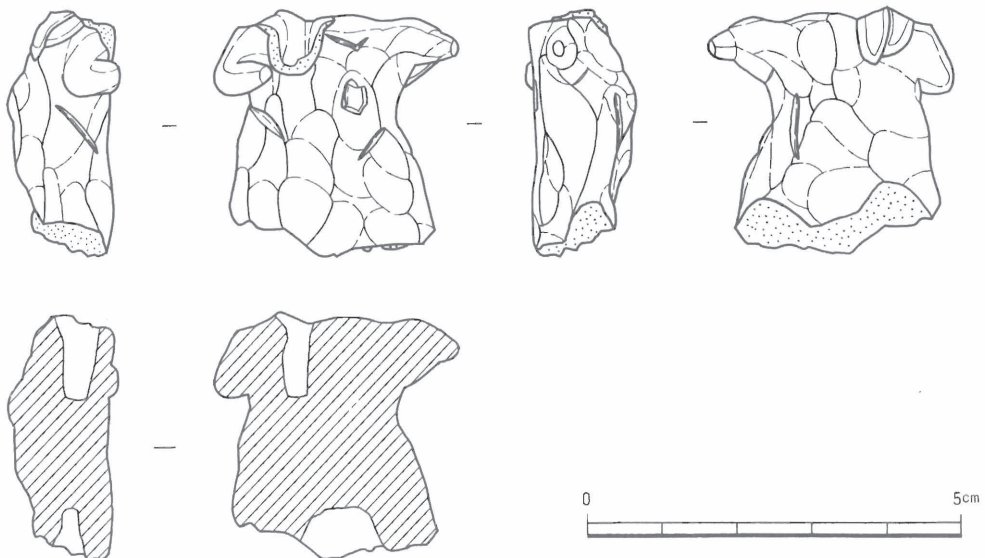
3. ヒト形土製品について

① 出土状況

本資料はプラン確認面直上から検出されている。平面的には掘立柱建物跡の柱穴の間から検出されているが、これに伴うものであるかどうかは不明である。また、先述のとおり層位的に年代を決定することは不可能である。

② 形態（第2図）

本資料は頭部と脚部を欠損しているが、明らかにヒト形をしている。右腕は鋭角に前屈させ左腕は水平に横に伸ばすという、相撲でいう「雲電型の土俵入り」によく似た姿勢をとる。胴部は下に向かってスカート状にやや開き、僅かながら前傾する。左側胸部には何かが剝離したような痕跡が認められる。位置的には乳房を表現したものであ



第2図 ヒト形土製品実測図



表



裏

写真1 ヒト形土製品(1:1)

る可能性が強いが、右側には見られず断定は出来ない。頭部は、かなり右側に偏っていたようである。背面には毛髪かと思われる突起がある。

特筆すべき点としては、頭部と胸部がソケット状にはめこまれていたと思われることがあげられる。これに関しては、時期的に同一であるとは断定出来ないものの谷田木曾地遺跡に類例が認められる。(第3図・註1)

③ 胎土・整形

本資料の胎土は土師器のそれと同一であり、微細な砂粒を混入している。また、焼成は良好である。整形は、全面にわたって指、またはヘラ状の工具で丁寧にナデられている。表面にはやや赤褐色を呈する部分が残っているが、風化により荒れているため赤彩を施した痕跡か焼成時の発色かは判然としにくい。今後分析してみる必要がある。

④ 時期

当遺跡では、確認面上に於いて広い年代に渡っての遺物が混在していることは先にも述べた。本資料の周辺でも同じ傾向がみられ、層位的に年代をあたえることは不可能である。

また、胎土や整形の技法からすると古墳時代以降のものと考えられるが、類例も少なく、金子裕之氏が集成したものに若干の例がみられるのみで

ある。(第4図・註2) このなかで氏は、「祭祀遺物は単独で出土することが多く、厳密な年代決定がむずかしい。」と、述べている。

このような理由から今回は残念ながら厳密な年代を与えることは出来なかった。

4. まとめ

上述のとおり、本資料は祭祀に関する研究を行ううえで大変資料価値が高いと思われるものの、今回は残念ながら古墳時代以降のものであろうという、大雑把な年代観を与えるにとどまった。これは現在遺構の調査が始まっておらずその年代や性格に関して詳細が不明であることと併せて、これまでに類例がほとんど発見されていないためでもある。調査の進捗にともない新たに年代を決定できることに期待すると共に、その時には改めて報告したいと思う。類例についてお心当たりのある方には、是非御教示願いたい。

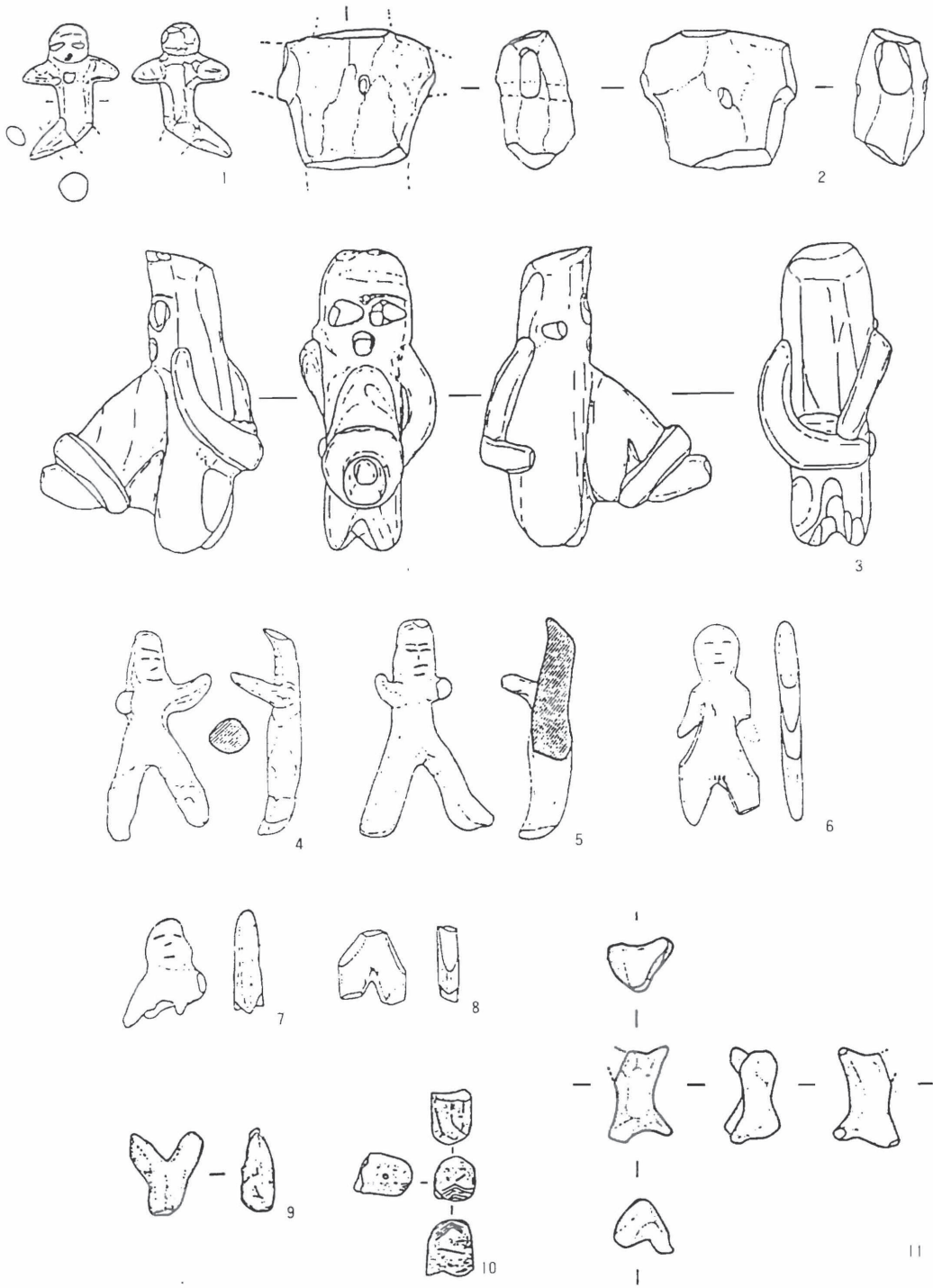
なお末筆ながら、本報告をまとめるにあたって御指導、御協力をいただいた調査員各位に感謝の意を表します。

註

1. 古内 茂・清藤一順他「谷田木曾地遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』1984
2. 金子裕之編「律令期祭祀遺物集成」1988



第3図 谷田木曾地遺跡出土 土製人形の頭部



第4図 律令期のヒト形土製品 — 律令期祭祀遺物集成(P154)より転載—
 1,2 東京 多摩ニュータウンNo144遺跡 3 静岡 南原3号窯
 4,5 鹿児島 岡野遺跡 6,7,8 鹿児島 大迫遺跡
 9,10 静岡 川合遺跡 11 静岡 東平遺跡